

古書を求めて

鈴木 聡

私の趣味は読書である。中でも古書を読むのが好きである。勿論、新刊本を読まないというわけではない。新刊本も読むが、古書には新刊本とは異なり、以前の持ち主が垣間見える瞬間のあるドラマ的要素があり、私はそれが好きなのである。

ある時、私は一冊の本をインターネット・オークションで落札した。書名は“New Guide to English Self-Taught”(和名『新語学独案内』)という明治42年に三省堂から出版された独習用の参考書である。私は英語を研究していることもあり、文法書にもある程度詳しいと自負している。しかし、今回の書籍は、不覚にもその存在を知らなかったこともあり、興味を持って入札した。入札する際に写真で、書籍の状態が確認できたが、何やら以前の持ち主が誰かに贈呈したものだということはわかった。

しかし、筆記体であったため、直接見てみるまでは、詳細は不明であった。幸運にも、その書籍を落札でき、書き込みを見ると、以前の所蔵者は著者フランス・ブリンクリーの息子ジャック・ブリンクリーであることがわかった。フランスは明治29年に三省堂から『和英大辞典』を出版した人物ということであらかじめ知っていたが、ジャックについては知らなかったので、インターネットで調べて見た。

すると、ジャックはフランスと水戸藩の女性の間生まれた人物であり、戦前は成蹊高校(旧制)で、戦後も立正大学などの日本の大学で教鞭をとっていたこと、さらにこの書籍は当時の政府・軍部によって全財産及び父親の資料を破棄され、国外追放処分になる前夜に友人の M.Makiko 氏に贈呈したものだことが判明した。しかも、この本を出品した人は埼玉県の人であったこと、私の出身も埼玉であり、父方の祖母の実家が水戸藩の出であったことから、何とも言えない奇妙な縁を感じたのである。

このような出会いは新刊書では決して味わうことはできない。だからこそ、私は今日も新たなドラマを求めて、古書を求め続けてしまうのである。